

バルザック『続女性研究』を読む

— アンリ・ド・マルセーの恋 —

柏木隆雄

要旨

本論集第17号掲載論文「バルザック『続女性研究』における二つのサロン —冒頭の意義—」においてバルザック『私生活情景』の最終景『続女性研究』の書き出しの部分を取り上げ、19世紀パリの社交界サロンについて、一見一般的に見える冒頭の語り手の説明が、小説を構成する各エピソードのヒントとなる要素を暗喩していることを、テキストの詳細な分析を通じて明らかにした。本論ではデ・トゥッシュ嬢のサロンの概観を語る「書き出し」に続く、時の宰相アンリ・ド・マルセーが一座の最初に語り始める彼の初恋譚を綿密に分析、彼の語りのきわめてストラテジックな構成を、使われる語法、単語の含意を探りながら明らかにするとともに、ド・マルセーの語り、その後の『続女性研究』を構成するいくつかの「裏切られた恋の仕返し（復讐）」をテーマにしたエピソードを先触れするものであり、サロンに集う社交界の面々の複雑な人間関係を、物語の導入部としての役割を果たしていることを明らかにする。

キーワード：バルザック、『私生活情景』、アンリ・ド・マルセー、語りの技法、
人物再登場法

1. 登場人物の会話術

前稿でバルザックの『人間喜劇』の最初の情景集である『私生活情景』の最後を飾る短編『続女性研究』について、アンリ・ド・マルセー若き日の人妻との恋の顛末、さらに「申し分ない女性」La femme comme il faut 論、カナリスによるナポレオン論、そしてモンリボー伯爵がモスクワ遠征中のエピソードを語る「大佐の女」、最後がビアンション自身の語り、一般的に「グランド・ブルテーシュ奇談」として知ら

れる話の5つのエピソードを重ね合わせた作品で、先の3つのエピソードが1842年のフルヌ Furne 版『人間喜劇』の第2巻に収められ、さらにフルヌ版『人間喜劇』の第4巻に収められた「グランド・ブルテーシュ奇談」*La Grande Bretèche* とを合わせた形でまとめるようバルザックが残したフルヌ版『人間喜劇』の訂正版に残された指示に従った編集で、現在の『続女性研究』というタイトルの下に一つの小説として読まれていることをのべ、その冒頭の部分にあたるパリの夜会の有り様についての叙述の分析を行った¹。

物語の冒頭、午前2時頃くらいに夕食が終わって、いよいよ残るべき者が残り、義理で夜会に参加した者は三々五々帰路に着く、あるいは別の親しい者同志がずっと消えていき、残った者が、いよいよこれまで話に耳を傾けて、けっして自分から話をしなかった連中が、さっきまで一緒におしゃべりしながら帰っていった人間について、辛辣な批評を加えたり、彼らには決して打ち明けることのない、とっておきの話を始めるパリの貴族の夜会というものの特徴的な性格、すなわち「本当の夜会」を鮮やかに浮き彫りにしたあと、本格的な展開に読者を引き込んでいく。そうした語り手と物語構成の枠組みの仕掛けを、「嘘らしくない」形で展開するために必須の部分として、『続女性研究』は、バルザック小説における書き出しの深い意義を示す貴重なモデルであり、次に展開するそれぞれのエピソードを分析する前提として、彼らの「語り」を支える基本構造であることを明らかにした。以下各エピソードについて分析を進めたい。デ・トゥッシュ嬢の夜会での「打ち明け話」の最初の語り手となるのはアンリ・ド・マルセーである。

ド・マルセーは首相に任ぜられて6ヶ月、すでに優れた能力をさまざまに示している。彼をずっと以前から知っている者は、ちっとも驚かず、彼がそのあらゆる才能やさまざまな適応性を政治の世界で広げて見せるのを見てはいたが、中には疑り深く、はたして彼が大物の政治家になる術を知っているのか、どうか、また彼がその状況の急に乗じて伸長してきたのではないかと思うのもいた²。

ド・マルセーが首相に任じられたのは、すでに何度も述べた、この夜会の主宰者デ・トゥッシュ嬢が恋の切り盛り役を果たす『ベアトリックス』*Béatrixe* (第一部1839年、第二部1845年)において1832年とされるから、この夜会は1832年の後半から1833年の前半にあたることになる。ド・マルセーは、美しい母親が若い時、イギリスの大貴族ダッドレー卿(『谷間の百合』*Le Lys dans la vallée* (1835) で、フェリックス・ド・ヴァ

1 柏木隆雄「バルザック『続女性研究』における二つのサロン ―冒頭の意義―」、『大手前大学論集』、第17号、2017.3.31、pp.89-109。

2 Balzac, *Autre étude de femme* in *La Comédie humaine*, III, p.674. édition de la Pléiade, 1976. 以後 A.f. と略する。

ンドネスを誘惑するダッドレー夫人は彼の若い妻である)に誘惑されて彼の愛人となり、やがてダッドレー卿が自分の愛人を年老いたマルセー伯爵に多額の持参金をつけることで結婚させ、二人の間にできた男の子の父親とした。実父ダッドレー卿が他の愛人に生ませた別の娘とド・マルセーが妖しい恋に落ちる顛末は、『金色の眼の娘』*La Fille aux yeux d'or* (1835) に詳しい。イギリス政界の大物貴族ダッドレー卿の政治力、知力と母親のたぐいまれな美貌の二つを身につけたマルセーが、パリ一番のダンディとして活躍する、その一つの要因がその出自にある。

第一の語り手として登場するアンリ・ド・マルセーは『人間喜劇』の数々の作品に登場することでも指折りの人物であるが、『黄金の眼の娘』での登場場面から類推すると、1792年の生まれということになる。(バルザックは1799年の生まれ。)つまり『続女性研究』の夜会においては、40才前後か。このマルセーと「ずっと以前から」*de longue main* 知り合っている人間には、その辣腕はとくに知れ渡っているものの、いざ首相とか、その地位を望む者には羨ましくてかなわぬ立場になると、その場にいる野心家の一人にやっかみの矢を放たせるところに、小説家バルザックの本領がある。

「何かありましたか？あなたのこれまでの人生で、ある出来事とか、ある考えとか、何かしたくなったことで、あなたが今のお仕事に就こうと思われたことが？」とエミール・ブロンデが尋ねた。「と言うのも、われわれは持っていますからね、みんな、ニュートンのように、それぞれの林檎を。上から落ちてはわれわれを地面にひきつけ、われわれの能力を発揮できる場を示してくれるわけです。」

「もちろん。」とド・マルセーが答えた。「これからみんなにそのことをお話ししましょう³」

問いを發したのはエミール・ブロンデ、彼は『骨董室』*Cabinet des Antiques* (執筆1836~1837, 刊行1838) でその青春時代が語られることになるアランソンのブルジョワ階級出身で、父親は裁判所の判事。パリに出て法律を学ぶが、ジャーナリズムで頭角を現し、才人として知られる。幼なじみのモンコルネ伯爵夫人と恋愛関係を結び、そのついでパリの社交界、ジャーナリズムで地位を占める。マルセーによって才人と認められて、この夜会の前年に県知事に任ぜられたことが、マルセーに彼が問いかける言葉の前に説明されている。したがってブロンデの発言は、単なる質問と言うより、話の矛先を相手の得意な方向に向けて、かえって相手の機嫌を取る、いかにも

3 *Ibid.*, p. 677.

「才人」らしい気の配り方であり（相手がわずか半年前に首相に任命された、とあることを見よ）、かつマルセーの話し方によって、彼の政治学を理解するヒントを得ようとする意図まで見えて、バルザックの人物描写の確かさを知ることができる。エミール・ブロンデの性格や出自、来歴、考え方を、地の文で何頁も費やすよりも、この一言の方が遙かに多くのことを語るだろう。

ここでブロンデがニュートンの林檎を引き合いに出すのは、いかにもジャーナリストらしい。たしかに木から落ちる林檎を見て万有引力の発見に繋がったニュートンのエピソードはよく知られているが、そうした機転の発露、くだけて言えば「出世の糸口」となった発想を、ブロンデはマルセーに尋ねている。アダムとイヴが楽園の禁を犯して食し、追放の憂き目にあう、そのきっかけが林檎であることもまた誰もが知る事だ。それこそ「上から落ちてはわれわれを地面にひきつけ」る林檎 *pomme qui tombe et qui nous amène sur le terrain* であればこそ、天上のアダムが地上に落ち来たったイメージをも同時に合わせ持つ言葉使いをすることで、ジャーナリスト、ブロンデの無意識の、あるいは意識的なマルセーへの相矛盾する思いを窺わせることになる。

ド・マルセーはもちろんブロンデの誘いの言葉を受けて、うん、とばかり、彼のとおきと思えるような話をする気組みに誘われて、まず政治家とはどうあるべきかを、以下のように語り出す。

「政治家というものがね、諸君。存在するのはたった一つの資質だけなのですよ。」と首相は言って、その螺鈿と金であしらったナイフを弄んだ。つまりどんな時でも自分を制御でき、どんなことでも、それぞれの事件の不都合な点を、利点をも考慮しながら斟酌すること、どんな偶然が起こっても、それができないといけない。要するに、内なる自己に冷静で、利害を離れた別存在があって、それが傍観者としてこの人生のあらゆる動きや情念や感情を見つめ、あらゆることについても、きちんとした裁きを精神の計算式のようなものでつけてくれるのだよ。」

「あなたがそんな風に説明されると、どうして政治家がフランスでは実に稀であるのか、よくわかりますな」と老ダッドレー⁴卿が言った。

たしかにマルセーの首相論は、はなはだ真っ当で、精神論的なものが多いが、それよりマルセーの意見を聞いて、すぐにダッドレー卿に口を挟ませるのは、マルセーが

4 *Ibid.*, p. 677.

卿の隠し子であることを知れば、彼が口を挟む理由がよく理解できるだろう。ダッドレー卿はわが息子の自慢もしたいし、その息子はじつはイギリス人の血なのだから、老政治家の皮肉と自慢が入り交じった言説が、ひとしお生彩を帯びるのである。このあたり言葉の配置の妙と言えようか。とはいえ、それを受けてマルセーが「感情の面から言えば、こういうことはじつはおぞましいことだ。しかも若い政治家にはそういうことがまま起こる。英の大首相、ピットにしてもナポレオンにしても、と言って、

「(略) 私がその怪物になったのはずいぶん早くからです。それもある女性のおかげでね。」

「私が思っていたのは」、と言ってモンコルネ夫人が微笑んだ。「私たち女性、政治家を作るより、はるかに多く壊してきたって⁵」

モンコルネ夫人がド・マルセーの言に言葉を挟むのは、先のエミール・ブロンデが口をきいたことを受けてである。彼女が『続女性研究』に登場するのは、初版ではなくフルヌ訂正版を最初とする。その版まで、言葉を挟むのはデスパール夫人だったのだが、先の子の存在を意識して、彼の恋人、さらに未亡人になって彼と結婚する『農民』*Les Paysans*（執筆は1844年、刊行は作家の死後の1855年）を踏まえての変更だろう。ド・マルセーが政治家という「怪物」*monstre* になったのは、一人の女性のおかげだ、という言葉に反応しての「私たち女性、政治家を作るより、はるかに多く壊してきた」という言葉は、ジャーナリストにして政治家を志すエミール・ブロンデを彼女が愛し、支えていることを自負するモンコルネ夫人が、暗にド・マルセーにも、サロンの人間にも、そして何よりもブロンデに、そのことを語りかけているのである。それに対して、

「もし恋のお話なら」とニュシンゲン男爵夫人が言った。「どうかお話の腰を折るようなご意見はやめていただきたいものね」

「これはまた正反対なご意見ですな！」とジョゼフ・ブリドーが声をあげる⁶。

先にサロンの会話の当意即妙と才気の応酬が、パリの一流の社交界の必ずあるべきものと説明されていたことが、ここで早くも実例のような形で示されるわけだ。ニュシンゲン男爵夫人は、いうまでもなく語り手ビアンシヨンの親友ラスティニャックの

5 *Ibid.*, p. 678.

6 *Ibid.*, p. 678.

愛人であり、ロマンティストとしての彼女の性格をそのまま示すような言葉とともに、モンコルネ夫人に対しての対抗的な気持ちをも表している。ちなみに彼女の愛人ラスティニャックは、ド・マルセー首相のもと、大蔵大臣に任ぜられるから、県知事であるブロンデよりもいっそう政治家としての成功があるわけで、『人間喜劇』の読者にとって、小説の舞台にいろいろな人間の名前が出てくることによって、こうした人間関係がたちまち浮かんで、物語の背景がぐんと広がることになる。そしてそれを茶化すようなブリドーの言葉もまた率直で、諧謔を愛する画家の言葉らしい皮肉の矢ということになる。これももともとはエミール・ブロンデが言った言葉となっていたのを、フェルヌ訂正版においてブリドーに変えたのである。もちろん、もしここでブロンデがニュシンゲン夫人に応酬したとする初版だと、かえってモンコルネ夫人との関係が稀薄に映ることになるから、ここは社交界の恋愛口説の見本のような会話を仕立てたのだろう。単なる意味のないような一行の言葉にさえ、恰も画龍に見事な点を打つ腕の冴えが示されるのである。

2. 少年の恋

ド・マルセーの打ち明け話は次のように始まる。

「私は17才だった。」とド・マルセーは言葉を継いだ。「王政復古がようやく地歩を固めようとしている時だ。私の昔からの友達知っていることだけれど、当時私はずいぶん血気にはやって、すぐ^{たぎ}滾りたつた。生まれて初めて人を好きになったのだが、まあ、今なら言ってもいいだろう、私はバリでも一番見栄えの良い男の一人だった。美しくもあったし、若さもあった。この二つの利点は偶然のなせるものなのに、われわれはまるで自分が手に入れたもののように誇らしく思っていたんだ。まあその余のことは口をつぐまざるを得ないがね。どの若者とも同じように、私が好きになったのは6才私より年上の人だった。ここにいる人の中では、誰も」と言って、彼はテーブルをひとわたり見回した。「その名前に気づくはずがないし、またその人と知ることもない。ロンクロールが、その当時、ただ一人私の秘密を見抜いていたけれど、それは黙っていてくれた。彼がにやりとするのではないかと心配していたんだが、彼は帰ったね。」と言って首相は彼の周りに視線を走らせた⁷。

7 *Ibid.*, p. 678.

ド・マルセーが「王政復古がようやく地歩を固めようとしている時」「17才だった。」と語っていることから、少なくとも彼は1797年以降の生まれだということになる。すなわち王政復古は1814年3月31日のタレーランの臨時政府がナポレオンの廃位を決定、続く4月6日軍隊がフォンテーヌブロー宮殿でナポレオンの退位を迫り、エルバ島にわずか800の近衛兵を擁するのみの一介の侯爵に身を落して、ブルボン王朝の復活が始まる。ところが翌1815年3月ナポレオンはエルバ島を脱出、しかしワーテルローに敗れて、ようやくルイ18世の親政が確保されるのが1815年6月、その時以降を称して、「王政復古がようやく地歩を固めようとしている時」というなら、ド・マルセーが17才ということは、1798年生まれということになる。

ところが『黄金の眼の娘』において、その1815年、彼はパキータ・ヴァルデスという異国の女性に出会っている。それが17才での初恋というのなら話はわかるが、その時ド・マルセーは23才ということになっていて、その場合彼は1792年生まれでないと辻褄が合わない。こういう不整合は、当然、ゾラの『ルゴン＝マカール叢書』のように最初から緻密な計算で人物構成して出来上がった『人間喜劇』ではないから、どうしても起こりがちで、バルザックは改版の度毎に修正してはきているが、それが追いつくはずもない。もう少し長生きすれば全体の辻褄も合わせられただろうが、案外そのままにしたかも知れない。というのも『人間喜劇』は確かにその連関の糸がきわめて重要な要素であることは確かだが、同時にその単独の作品そのものの独立性というか、ダイナミズムでそうした細かいことに拘泥すべきでない、という意見もある。そのあたりが未完成である『人間喜劇』の宿命とでも言えようか。

しかしまたバルザックに同情的に考えれば、ここでド・マルセーが17才とあるのは、必ずしも地の文にあるのではなく、彼の自称であるから、ある意味で彼自身の思い違い、あるいは意図的な年齢のはぐらかし、と取ることもできる。あくまで彼が未成年の時に出会った女性との物語とし、現在7月王政でマルセーやラスティニャックが活躍する時代となっているわけで、王政復古はある意味で年代的にそれほど遠くはないが、時代感覚としてきわめて遠いイメージがあって、それが17才という年齢の出てきた理由と、無理に言おうと思えば言えるし、さらにマルセーの話自体が作り話、ということでもあり得る。いずれにしても、ここはサロンの客たちと同様に、マルセーが17才の時のこととして聞いておくことにしよう。

ド・マルセーが自らの美貌を誇るのはいささか妙だが、これはそうして生まれついたダンディの誇りでもあろうから許されるだろう。恋の原則として、若い娘は年上の男に手ほどきを受け、それを若い男を相手にいっそう磨きをかける。その若い男が中年になって、若い女を手ほどきする、というサイクルが、当時の社交界ということになる。ロンクロー侯爵はセリジー伯爵夫人の兄でもある。いわゆる13人組の一人と

してパリの社交界を遊泳し、マルセーの片腕ともなって内務大臣を務めたりする。ロンクロールとマルセーが知り合ったのは、『黄金の眼の娘』の物語の中、まさしく1815年にシャンゼリゼでばったり偶然に出会ってお互い相手がどういう人物かを見抜き、つき合いが始まった、とあるのだから、たしかにマルセーがいう「その当時、ただ一人僕の秘密を見抜いていた」の言葉はある意味で正しい。そしてそのロンクロールがその時には辞去してその場にいず、マルセー一人が若い日の自分の秘密を語る、という展開も、ド・マルセーの「打ち明け話」の信憑性へのゆらぎを、作者が仕掛けていることもあり得る。

ド・マルセーの語りは続く。

「それから半年というもの、自分の恋に夢中で、ひょっとしたら自分の情念に自分が支配されているのではないかなどと思ひもせず」と首相は言葉を継いだ。「僕はわれながら誉めてやりたいほどそうした相手のすっかり神格化に浸りきっていた。それは青春の勝利でもあり、儂い幸福でもあるのだがね。その人の使い古した手袋を後生大事に持ち、その人が付けていた花を煎じて飲んだりもし、夜中にまた起き出して、その人の窓辺を眺めにさえ行ったよ。全身の血が心臓に上るんだ。その人が使っていた香水を嗅ぐとね。私には思ひもよらなかった。女というものが大理石の上にのせたフライパンだということを」

ここには、いかにも恋に夢中になった少年のうぶで、純真な行動が素直に書かれている。語り手がここでド・マルセーと名前で呼ばず、「首相」とその職責で述べているのは、恋に夢中の少年と、分別盛んな中年の男とのギャップを強調するためにほかならない。そのギャップが大きければ大きいほど、マルセーの「現在」を作りあげたという女性の存在が大きく印象づけられるわけだ。まず「その人の使い古した手袋」は、彼女の手の触感につながり、初めて最初に触れる女性の体の一部の認識とともに、その手指を感じることで、その女性の全体の肉體性がきわめて鮮やか印象づけられるだろう。さらに「その人が付けていた花」は、もちろん手袋に続く触感も想起されるが、さらに香りという嗅覚を刺激する。そして同時に花の美しさ、香りとともに、その花が付いている場所、すなわち胸元への関心を暗に導くことになる。その上、花を煎じて飲む、ということはそのまま彼女の肉體的な浸潤をも意味するかもしれない。今ド・マルセーが語る夜会の時刻は真夜中だ。そうした触感と味覚と嗅覚は、その時

8 Balzac, *La Fille aux yeux d'or* in *La Comédie humaine*, V, édition de la Pléiade, 1976, p. 1058.

9 Balzac, *A.f.* p. 678.

もっともその欠乏が実感される。それゆえにこそ、その欠乏をひたすら視覚の充足で満足させようとするのである。『谷間の百合』におけるフェリックス・ド・ヴァンドネスが、モルソフ夫人の館の明かりを眺めて、その密かな欲望を抑えるのと、ほとんど同じものがそこにある。

モルソフ邸での辞去が遅くなってフラペールのシェネル氏の館へ戻る際、別れの挨拶として、これまで許さなかったモルソフ夫人の手への口づけを許され、感激して帰る場面を、フェリックスはこう回想する。

私はその手に何度も口づけをしました。そして私が目を上げると、涙が彼女の両眼に見えたのです。彼女はまたテラスに上ると、私をもう一度見て、草原に視線を移しました。フラペールへの道に出ると、また彼女の白いドレスが月明かりに照らされているのが見えました。それから少しして、明かりが彼女の部屋に点りました。

「ああ、私のアンリエット！」と私は心に思いました。「あなたに最も純潔な愛を。永遠にこの地に輝くような愛を！」

フラペールへ戻る道すがら、私は歩を運ぶたびに振り返りました。自分の中に何とも知れない、えもいわれぬ喜びを感じていたのです¹⁰。

フラペールという隣接の地を意識的に対置させることによって、クロッシュグルドの土地の精のごとき存在としてのモルソフ夫人が、かえって強調されるのが良く理解できるだろう。白いドレスで月明かりに照らされて草原の彼方に浮かび上がる彼女は、まさしくクロッシュグルドの土地の精そのものだ。丘の上の城館の部屋に点る明かりは、それこそフェリックスの心に輝く光と取ることができる。

「女というものは大理石の上にのせたフライパンだ」“les femmes sont des poêles à dessus de marbre”という最後の感慨は、そうした熱狂の時代、青春の時期が終わって、さらに積み重ねられた経験の末に、現在の中年男マルセーが持っている女性観であることを明らかにする。フライパンは熱い焔炉の上にあって熱くなる。それが冷たい大理石の上に置かれたとあるのは、本来熱くなるはずのものが、それは見かけだけで、冷たく冷静のまま、それを熱くするためには、女性を動かす別の力が必要だということだろう。もっと言えば一見すぐ沸き立ちそうに見えながら、じつはその白い肌に見える外観そのままに、女性自身が熱を帯びて発熱することが少ないことを皮肉る言葉であるかも知れない。それだからこそ、すぐカン夫人が応酬して、

10 Balzac, *Le Lys dans la vallée* in *La Comédie humaine*, IX, édition de la Pléiade, 1978, p. 1038.

「どうかそんなおぞましい言葉は、私には使わないで頂けません？」とド・カン夫人が言って微笑んだ。

「私なら鼻であしらって、そんなおぞましい言葉を公然と言った哲学者に鉄槌を加えますがね。もっともなかなか奥深い正しさはあるようですが。」とド・マルセーは答えた。¹¹

ド・カン夫人は『私生活情景』では『マダム・フィルミアニ』 *Mme Firmiani* (1832) の中で、オクターヴ・ド・カンと秘密に結婚する女性として登場するほかに、『幻滅』 *Illusions perdues* (1837-1843)、『ゴリオ爺さん』 *Le Père Goriot* (1834)、『ソーの舞踏会』 *Le Bal de Sceaux* (1829) などにおいて、社交界の女王の一人として華々しい顔を見せ、先に登場するデスパール夫人などと同様、『私生活情景』において、『続女性研究』のすぐ直前に置かれた『禁治産』、『結婚財産契約』にも登場しているから、読者としても彼女の印象がさらに鮮やかになって、そのイメージを濃くするわけである。そしてド・カン夫人になる以前を描いた『フィルミアニ夫人』においては、一見謎めいた外見にも関わらず、きわめて真面目な、信頼のおける女性として描かれていたから、ド・マルセーの「女は冷たい大理石に乗ったフライパン」という言葉に反応させたのだろう。ド・マルセー言う「哲学者」とは誰か、プレイヤッド版の注にもなんの言及もなく、また論者自身も現時点で突き止めてはいない。あるいはド・マルセーがド・カン夫人に抗議されて、いかにも他の哲学者が言ったように誤魔化したのか。それならいっそうド・マルセーのとほげ方が社交界のライオンらしい、ということになるだろう。

ド・マルセーは彼の愛した女性との関係について次のように語る。

まったくこの上ない貴婦人で、しかも未亡人で子供もない（いや、そこが肝心な点なのだ！）、私の熱愛するその人はひたすら家に引きこもって私のシャツに自分の髪の毛で徴をつけていた。¹²要するに彼女は私の熱烈な愛に、また別の熱愛で応えてくれたわけだ。そうになると、どうしてもその情熱を信じないではいられなくなるよね？ そんなにも熱愛されているのだから。われわれはお互い心を合わせて、これほど完璧で、美しい恋を世間の眼から隠すようにした。で、それは大成功だった。¹²

11 *Balzac, A.f.* pp. 678-679.

12 *ibid.*, p. 679.

ド・マルセーの23才になる美貌の愛人は、身分が高く、夫もなく、子供もいない。「そこが肝心な点なのだ！」と言うように、莫大な財産を持つ未亡人でも子供がいれば、その方に財産は行く。もとより子供がいると情事のさわりになる、ということはあるけれど、それ以上にしたたかな計算をこの17才の少年はしていることになって、まことに末恐ろしい。そうした計算のできるところが、彼を宰相にまで押し上げる原動力になったことが暗に示されるわけだが、それこそがマルセーの、あるいは自分でも気づかずに、その性根を暴露しているかのようで、きわめて興味ある行文として読める。彼の恋人は「ひたすら家に引きこもって私のシャツに自分の髪の毛で徴をつけていた。」*s'était enfermé pour marquer mon linge avec ses cheveux* は、ひたすら彼のことを愛して、片時も離れなかったという意味合いを含ませているのだろう。20世紀のラディゲの『肉体の悪魔』*Le Corps au Diable* (1923) を先取る17才と23才の男女の恋は、確かに秘め事に値する。

だからどれほどの魅力をわれわれが隠れ住んで味わったことか、おわかりと思う。その人について私が皆さんに話すことはもうないだろう。ただその時は、完璧で、今だって十分パリで一番美しい女性の一人を通る人だ。じっさいその当時はその人がひと目見てさえくれたら殺されてもいいと思ったくらい。彼女は十分な財産のある状態でいたから熱愛されもし、愛しもしていたが、王政復古になるとまた一段と注目を浴びて輝きはしたものの、その家名からすると、あまり誉められたものではなかった。¹³

ド・マルセーのいうその女性が、現に今もパリで美しい女性として通っている、ということから、居並ぶサロンの客たちにはおおよその見当がつくのだろうか。いずれにしても彼女はすでに46才を超えているはずで、それだからこそ、「その人について私が皆さんに話すことはもうないだろう。」*D'elle, je ne vous dirai rien* とマルセーもいうのだろう。美人の一瞥を得られれば殺されてもいい、という言葉は、いかにも17歳の純情な言葉であって、もしライヴァルがいてそれを咎め、決闘沙汰に及ぶ危険を冒してでも、という意味である。財産の問題は恋愛においてきわめて重要であることが次の言葉でもわかる。王政復古が彼女に影響を与えたというのは、いわゆる帝政時代の新興貴族の場合には許されることでも、王政復古がなって、再び旧時代の風習にもどり、かつての名家であればあるだけ、その暮らしぶりも、生活態度も格式を張らなければならない。その矛盾をいうのである。

13 *Ibid.*, p. 679.

一方のド・マルセーの方は、財産は潤沢であった。

私のいた状況からすれば、うぬぼれて疑いなど持つことはなかった。確かに嫉妬深さは、当時ものすごいもので、あのオセロを120人分合わせたようなものだったけれど、このおぞましい感情は私の中にちょうど金とその鉱床の中に眠っているようなものだった。召使いに棒で自分を殴らせかねないくらいでしたよ、もし自分が卑劣にもその天使のような人の純粋さを問題にするようであれば、ね。そんなにもか弱く、しかもきりっとして、実に美しいブロンドで、実に純情で、素直だった。それにその目も青く、そこからその心が覗くんです。すっかり私の言う通りにする人だった。私の眼からみると¹⁴。

ここでド・マルセーがその年上の人妻を説明して「そんなにもか弱く、しかもきりっとして、実に美しいブロンドで、実に純情で、素直だった。それにその目も青く、そこからその心が覗く」*si frêle et si fort, si blond et si naïf, pur candide, et dont l'œil bleu se laissait pénétrer à fond de cœur,* という言葉に注目しよう。それらは実に主観的な言葉ばかりを羅列しているのである。どうしてブロンドなら、どうして青い眼なら信頼できるのか。このド・マルセーの打ち明け話で大事な点は、「嫉妬」*jalousie* という概念である。以後語られる物語の根本的なキー・ワードは「嫉妬」*jalousie* とその発露としての「仕返し」*vengence* だ。これこそは『続女性研究』を貫く大きなテーマと言っている。このキー・ワードが物語の始まりのド・マルセーの語りの中でさりげなく、語られているところに注目すべきだろう。

3. 「仕返し」への序章

中年の思慮深い政治家となったマルセーは、そうした自分の当時の純情さを自ら嘲るように、こう言う。

「ああ！諸君！」と苦しげに叫んだ宰相は再び青年に戻ったようだった。「がちんと頭を大理石の上におつけないと、そうした詩的なものを拭い去られないんだ！」¹⁶

14 *Ibid.*, p. 679.

15 Pierre Abraham は *Créatures chez Balzac, Gallimard*, 1931 にバルザックの登場人物の身体的特徴を図式化して、眼の色、髪の毛、その他そうした外観的な描写で人物の性格が描き分けられている。

16 Balzac, *A.f.* p. 679.

つまり、若い時代の詩的な恋愛との訣別には、非常なショックを経験しなければならぬことを、彼は強調する。そのショックを「がちんと頭を大理石の上にぶつける」ことで得る、というのは、先にあったフライパンを載せた大理石のイメージを蘇らせるだろう。つまり人生の教訓は、男性に取って、常に女性から与えられる、あるいは女性の存在を抜きにしては考えられないことを、彼の言葉は暗示しているとも言える。その言葉を語る時のド・マルセーを「再び青年に戻った首相」le ministre redevenu jeune homme とわざわざ注記するのは、そのことをさらに印象づけるだろう。

ド・マルセーとその人妻との関係は、パリの社交界の知らぬ内に進行していく。すなわち「お互い見交わさず、避け、お互いの悪口を言う」Ne pas se regarder, s'éviter, dire du mal l'un de l'autre¹⁷ という方法である。また「なんでもない人間に偽って情熱を示し、無関心の風を本物の恋人に対して装う」une fausse passion pour une personne indifférente, et un air d'indifférence pour la véritable idole という方法もあって、世間はこれに騙されることが多い。しかし、とマルセーは言う。そのためには「二人がその時相手の気持ちを確認している必要がある」ils doivent être alors bien sûr l'un de l'autre。つまり相手を疑いだしたら、すなわち、例のキー・ワード「嫉妬」の気持ちが起こらない場合にのみ、この「遊び、あるいはゲーム」jeu は成功する。この一見何でもなような、単なる恋愛の作法の説明としか取れないマルセーの言葉は、一つの共通低音のように全編に響き続けていくことを記憶しておこう。この方法こそは、彼女が社交界で「替え玉」として、ド・マルセーとの間の恰好の揶揄の対象となっていた男と人妻との関係でもあったのだ。

彼女のからかいの相手は、当時皆に人気のあった宮廷人で、冷ややかな、信心に凝り固まった男だった。彼女は一度も彼を家に招いたことはなかった。¹⁸

つまり皆に人気のある男だからこそ、ごまかしの相手には恰好ということになったのだろう。当然ド・マルセーとは違うタイプの男であるはずだ。こうしてゲームのような、しかし密やかで真剣な恋が進展していく。

人妻と自分の関係について、マルセーはこう続ける。

まったく結婚はわれわれの間では話題にならなかった。6才の差がどうやら彼女

17 *Ibid.*, p. 680.

18 *Ibid.*, p. 680.

の心を占めていたのかもしれない。彼女は私の財産がどれほどあるか承知していなかった。これは原則として私はずっと隠していたのだ。私の方は、その人の才気に心を奪われていたし、その物腰や、知友の広がり、世間についての知識も素晴らしいと思っていたから、結婚するとなれば、考えることなくそうしていたろう。それでもそうした慎ましさが私には心地よいものだった。もしその人の方から、結婚話を何らかの形で持ち出していたら、おそらく何か卑俗なものを、その完璧な魂に見出していたと思う¹⁹。

17才の少年が結婚、ということを実際に考えたのか、どうか。それはともかく、若い彼にとって、あまりに完璧に映った女性が（彼は「才気に心を奪われていたし、その物腰や、知友の広がりや、世間についての知識も素晴らしいと思っていた」*charmé de son esprit, de ses manières, de l'étendue de ses connaissances, de sa science du monde* というところからしても、先にみたように、あくまで外観的な魅力でしかないことに注意すべきだろう。）、結婚というような、俗なことを口にするなど、とても考えられなかったのだ。しかし、同時に世慣れた者の眼からすれば、そうした女性の態度を、単に未経験な、純情な若い男を適当にたぶらかし、弄ぶものと言えるかもしれない。あくまでマルセー側が、思いこみで恋にひた走っている印象を受ける。その一つにその女性の生の言葉が引かれず、常にマルセーが語る言葉で、その女性像を思い描くしかないからだ。

しかし自分自身の生き方を変えた、とド・マルセー自身が言う事件がいよいよ起こる。

「ある朝、熱のある時のだるい感じ、あの風邪のひき始めに覚えるものを感じて、私は手紙を書いて楽しみな祝祭を延期してもらうことにした。パリの屋根の下、ちょうど海の中の真珠にたとえられるような、隠れて密やかに行っていたあの楽しさを。手紙を出してしまうと、後悔が起こった。「あの人は僕が病気なんて思わないのではないか！」そう私は思った。彼女はよく嫉妬深くなったり、疑り深い様子をすることがある。嫉妬が本物になると、」と、ド・マルセーは話を中断してこう言った。「それこそ、唯一無二の恋という明白な証拠なのだ²⁰。」

マルセーが言う「パリの屋根の下、ちょうど海の中の真珠にたとえられるような、隠れて密やかに行っていた楽しみ」というのは、彼の実父であるダッドレー卿がイギ

19 *Ibid.*, p. 680.

20 *Ibid.*

リスから彼に送ったアラブの名馬スルタンに乗って、馬車で出かける彼女の傍らにずっと付いて行き、彼女のもつ花束に手紙を書いて差し入れる、という極めてロマンティックな行動を楽しんでいたことを言う。夜会では人目があって、わざと知らぬ振りをしていただけだ。

その日、気分が優れない若いド・マルセーは、風邪で出かけられない、という自分の断りのカードが、相手の女性の嫉妬を招いて、病気ではなく、あくまで会わない口実の一つと考えることを懼れた。というのも、先に引いたド・マルセーの言葉の中で「私のいた状況からすれば、うぬぼれて疑いなど持つことはなかった。確かに嫉妬深さは、当時ものすごいもので、あのオセロを120人分合わせたようなものだったけれど、このおぞましい感情は私の中にちょうど金とその鉱床の中に眠っているようなものだった。召使いに棒で自分を殴らせかねないくらいでしたよ、もし自分が卑劣にもその天使のような人の純粹さを問題にするようだったらね。」と言っていたことを思えば、彼は相手に対する嫉妬は、なるべく抑え込もうとしていたのだ。

ところが相手の年上の恋人はというと、「彼女はよく嫉妬深くなったり、疑り深い様子をするがあった。」*Elle faisait la jalouse et la soupçonneuse.*とあって、これは彼女が嫉妬深く、疑り深いというよりも、いかにも嫉妬深い、疑り深い様子をしてみせる、ということであって、この表現には彼女は自分の相手に対する愛情の証のように、常にそのそぶりをみせていたことを想像させる。「嫉妬」*Jalousie*、それがどんな風に男女において働きが異なり、発揮する場が異なるか。物語の発端であるド・マルセーの話は、あくまで淡々と、もっと言えば単純な話しぶり、深い意味をもたぬように読者には見えるように仕掛けられている。じつはそこにこそ作者独特の技巧が施されていることを理解しておく必要がある。

ド・マルセーはもう一通手紙を書くことにする。しかも熱を冒してその手紙を自分自身で彼女の元へ持っていくことに決めるのだ。

私たちの住まいは川を隔てていた。パリを横切らないといけないけれど、いずれにしても彼女の邸まではちょうど良い距離だ。使い走りのものに言って、すぐに手紙を持っていくように言いはしたが、ふと素敵な考えが浮かんで、辻馬車で彼女の邸の門の前まで行き、ひょっとして彼女が2通の手紙を同時に受け取りはしないか見ようとした。私が2時に到着したその時、大きな門が開いて、一台の馬車を通すところだった。誰のか、というと、……それが例のからかいの相手だったのだ²¹！

21 *Ibid.*, p. 681.

川を、すなわちセーヌ川を隔てて二人の邸がある。ということは、ド・マルセーの邸がフォブール・サン・ジェルマンにあり、その女性の邸がショセ・ダンタンにある、ということになる。彼女への手紙を faire monter la lettre とあることがそのことを示している。ショセ・ダンタンはもともとは旧貴族が住む区域だったが、革命のあと、そうした旧貴族たちが亡命したり、断罪されたりで、数が少なくなり、その後を新来の大ブルジョワジーが館の主となった。一方のフォブール・サン・ジェルマンは、ナポレオン帝政時から王政復古期にかけて、裕福な大貴族が邸宅を構えるシックな区域である。『続女性研究』の冒頭に、デ・トゥッシュ嬢のサロンのフォブール・サン・ジェルマン界隈の批評が出てきたのは、そのサロン論に続いて語られるド・マルセーの打ち明け話に生きてくるわけだ。そして彼の恋人である人妻のステータスも見えてくる仕掛けになっていることがわかる。

どうしてド・マルセーは辻馬車で彼女の家に向かうという「素敵な考え」を思いついたのか。いつもなら名馬を駆って馬車の横に付き添うべきド・マルセーが辻馬車で行けば、まさか貴族の息子が辻馬車でくるとは思っていないから、彼の突然の訪問に驚かせることができる。まして病気で行けない、という手紙が届いて、それを読んでいる最中に手紙の主が現れたら効果は抜群だろう。そうド・マルセーは考えて出かけていくのだが、そこでは思いもかけない光景が展開する。このあたり、動詞を「物語現在」présent historique で使って、話の緊迫度をます技巧にも注意しておこう。

思いもかけない光景。先に一度も家に入れたことがないはずの、眼くらましであるはずの男の馬車が入っていくではないか。彼を目撃したマルセーは、それこそ、そのことを思い出すといまでも血が騒ぐと告白しているほどの衝撃を受ける。一時間ほどしてまた戻ってみると、まだ馬車は止まっている。その馬車は、

やっと、3時半になって、馬車が出た。私は恋敵の表情を見定めることができた。重々しげで、にこりともしない。が、彼は恋している。そしておそらくは何か大事な用事だったのだ。私は約束の場所に出かけた。私の心の女王もそこへやってくる。落ち着いて、端正、平静そのものだ。²²

馬車はほぼきっかり1時間半して出ていった。その時ド・マルセーが目撃した男の様子はあまり恋人らしくないような描写のように思える。つまり1時間半して馬車が出たことから考えると、もし逢い引きとしてもそれほど長い訪問ではないはずだ。むしろ、午前中に逢い引きをして男の馬車で送られてきた、と解釈することもできる。

22 *Ibid.*, p. 681.

しかも男の表情は深刻な様子。その男が彼女を愛している、と判断するのは、おそらく暫時の別れに胸をつまらせているのかも知れない。そのようにド・マルセーは男の表情から判断したのだろう。あるいはあくまで若い嫉妬に燃えるマルセーの心情からの誤った判断かも知れない。

とは言え、読者にはその疑いの正当性も誤謬も判断できる材料はない。しかし、二度目の手紙で知らせたいいつもの逢い引きの場所に行くと、彼女が現れ、しかも彼の見るところ、「落ち着いて、端正、平静そのもの」*calme, pure et sereine* という彼女の様子は、いかにも何事もなかったようで、真相は闇の中ということになる。

さて、逢い引きの場所に来た彼女のそうした態度を見て、風邪の病を押して出かけてきたド・マルセーも、いったんは嫉妬を鎮める。

ひとたび、自分の嫉妬心を抑え込んでしまうと、私はじっくりと観察することができた。私が病気であることは見ればわかるが、恐ろしい疑惑の念が私を苦しめて、いっそう病の様をつのらせることになった。やっとのことで話の接ぎ穂を見出して、それとなく次のような言葉を挟むことができた。「あなたの家には今日の午前中、誰も来なかったのですか？」そう言ったのは胸騒ぎがして、彼女が私の朝の最初の手紙を見て、午前中をうまく使ったのではないかと思ったからだった。「あら！」と彼女は言った。「一人前の男になったのね、そんなことを思い付くなんて！この私が何かほかのことを考えるって？あなたが苦しんでいるのに？2通目のお手紙を頂くまで、私はずっとどうしたらあなたに会いに行けるかと思案していたのよ。」「じゃあ、あなたはずっと一人でいらしたんですか？」「一人でよ」と彼女は答えて私を見たが、まったく罪の意識などない完璧な態度だったから、こんな風な態度なら、あのムーア人もデスデモーナを殺す羽目になったのだと思うくらいだった。²³

自分が病気で朝の逢い引きに来られないとなれば、他の男と会っていたのではないか。マルセーが彼女の邸に出かけたときに男の馬車が入ってきた。すなわちその馬車に彼女も一緒に乗って帰ってきたのだ。それがド・マルセーの疑念であり、嫉妬の発露でもあった。それに対する女の反応は興味深い。「一人前の男になったのね、そんなことを思い付くなんて！」という言葉は、いかにも年上の女性の言葉だ。と同時に、来客のことを聞かれて、たちまちこういう反応をするのは、ある意味で語るに落ちる、ということがある。デスデモーナの場合、あまりに夫の愛情を信じており、かつ彼女

23 *Ibid.*, pp. 681-682.

の方が若い、それこそド・マルセーの自称17才と同じ年齢だったはずで、オセロは40才を超えた中年男の違いはある。このこともうっかり見逃しがちだが、注意しておかねばならない。というのも、まさしく現在この話をしているド・マルセーは、当年のオセロであって、17才の過去について話しながら、じつは現在の彼の思料を語っていることにもなるからだ。

彼女は真っ赤な嘘をついている。第一自分が彼女の邸に出かけたときに男の馬車が入ってきて、一時間半も止まっていたではないか。ド・マルセーは若いだけに、そうした嘘に極端に反応する。

たった一つの嘘がこうした絶対的な信頼を壊してしまうんだ。ある人たちにとっては恋の根底そのものであるものをね。その時私の中に生まれたものを諸君に説明するためには、われわれには内的な存在がある、ということを知る必要があるだろう。つまり目に見える「われわれ」は、その鞘のようなものであって、この存在はまるで光のように輝いているけれど、じつは同時に闇のように繊細なのだ。……というわけで、まさにこのほかならぬ「私というもの」が、その時から永遠に薄もののヴェールを纏ってしまった。実際、冷たく、痩せこけた手が、経験という経帷子を私に渡し、永遠の喪につかせるように感じたのだよ。われわれの魂に最初の裏切りが纏わせる、その永遠の喪をね。²⁴

ド・マルセーの言葉はやや大げさな感じがあって、絶対的に信じていたものが裏切られる極度のショックを表明しているが、そこにはシェークスピアの『オセロ』の雰囲気大きな影を落としていることは確かだ。嫉妬というものが、「経帷子」le suaire や「永遠の喪」le deuil éternel を人間の本質的な内面にまともせ、決定的に人を信じなくなる図式が説かれるのである。このこともまた物語が展開していくにつれて、少しずつその領海の範囲が広がっていくことになるけれど、ド・マルセーの17才という若い感性での経験を最初におくことによって、この後、さまざまなバランスをとりながら、『続女性研究』の全てのエピソードにおいて、それこそさまざまな嫉妬とその反応が示され、論議されていくことになる。さらに重要なことは、少年には似合わぬマルセーの（おそらく、現在こうして話している40才代の男としての思想がそう言わしめているに違いないが）、こうした嫉妬心というものと、死のイメージとが直結している、ということもマルセーの言葉は、読者の心に表面的にはさりげなく、しかしよく考えると、じつに巧みにかすかな嫉妬—死のイメージを形作っていくこと

24 *Ibid.*, p. 682.

になるのである。

4. 「仕返し」の罪

ド・マルセーは意外な彼女の返事に、うつむいて赤くなり、おもわずも涙ぐむ。そして「この人がお前を欺いているのなら、お前にふさわしい相手ではない！」 Si elle te trompe, elle est indigne de toi! と自ら言い聞かせるのだ。彼の涙を見た女は、いかにも同情するかのようにド・マルセーの家まで送り届ける。そしてその行く道の間にも、いろいろとなだめ、また取り繕おうとするのだが、彼の心はとけないまま。「彼女は泣いて帰っていった。それほど遺憾だったのだ、私を慰めることができなかったのが」 Elle pleura en me quittant, tant elle était malheureuse de ne pouvoir me soigner elle-même.²⁵ ということになる。そしてド・マルセーがそこから得た結論は、「必ず例の猿が一番綺麗で天使のような女性の中にいるのだ」 Il y a toujours un fameux singe dans la plus jolie et la plus angélique femmes! というのだ。

「例の猿」 un fameux singe というのはこの『続女性研究』の冒頭で語り手が話す中にラ・フォンテーヌの寓話の一節がある。すなわち *Fables*, IV, 7の「猿とイルカ」 *Le Singe et le Dauphin* に出てくる猿のことを言うのだろう。このイルカの背中に乗って海を渡ろうとして失敗する猿の寓話は、『続女性研究』という物語の語り手が導入部で用いるもので、語り手の匿名的で客観的な叙述における言葉を、その物語の登場人物の一人であるド・マルセーがそのままに引き合いに出すのは、元来の小説の建前からすれば、おかしな話ではある。しかし、すでに誰もが知っていることが前提となるラ・フォンテーヌの寓話における猿ということになれば、「例の猿」 un fameux singe と言えば、誰もが知っている寓話を指すと普通に考えられるから、必ずしもマルセーの語りの中に出てくるのは不思議ではない。いずれにしても読者の想像力の手助けとなる仕込みを、作者が巧みに行っていると考えれば納得がいくだろう。

ラ・フォンテーヌの寓話「イルカと猿」は船が難破するとイルカたちが助けて船客を岸まで運ぶ。アテネの近くで難破があった時、猿が一匹人間を装ってイルカの背中に乗って助かろうとした。もうすぐ岸に着く、というところでイルカがいろいろ猿に尋ねると、いかにも人間であるかのように応対する。誰々を知っているか、というところ、もちろん、とあることないことを言う。ふとイルカがピレ le Piréeを知っているかと聞くと、猿はもちろん、と答えて、毎日会っている、親友だと答える。ピレは港の名

25 *Ibid.*, p. 682.

だから、これは人間の乗客ではなく、猿がその振りをしているとさとしたイルカは、背中の猿を落として溺れさせてしまう、という話である。ド・マルセーが「かの猿」というのは、ラ・フォンテーヌの寓話で諷される、自分の都合のよように、素直なものを騙して、いかにもそれらしく見せるものの、ついには馬脚を現して失敗する人間のことを言うのだろう。

「必ず例の猿が一番綺麗で天使のような女性の中にいる」というド・マルセーの言葉を聞いたその場の女性たちの反応を、物語の語り手は「この言葉を聞いて、女性は皆目を伏せることになった。まるでこの残酷な真実が、あまりに残酷に言い放たれたことに傷ついたかのよう²⁶。」と記す。「女性は皆目を伏せる」、ということは、ド・マルセーが女性の欠点について、はしなくも真実を述べたことになるのだろうか。

ド・マルセーはその後自分がどう過ごしたかは語りたくない、しかしその恋愛によって自分は政治家としての自分を自覚した、と言い放つ。すなわち人を信用せぬこと、あるいは率直すぎる性格がその時に改まったゆえに、政治家を自覚した、という意味か。それはあまりに単純な話だと決めつけるのは簡単にすぎるものの、『人間喜劇』におけるアンリ・ド・マルセーの分析という命題において、これから発展していくべき糸口の一つとなろうが、それよりも『続女性研究』の核心的な部分を構成するものとして、それに引き続いて述べる彼の言葉に耳を傾ける必要がある。

「もう一度酷薄な精神でもって本当に残酷な仕返しを相手の女にして見せたのをよく見直してみると」とド・マルセーは話を続けた。「私自身軽蔑もしたし、自分が卑俗だと感じました。知らず知らずのうちにおぞましい掟を作っていたんだ、「自分に甘くする」という掟をね。女に仕返しをする、ってことは、その女しかわれわれにはいないということ、その女なしではやれない、っていうことを認識することではないのか？ そうなると復讐というものも、その女をもう一度わがものとしようとする手段ということになる。もしその女性がわれわれにとっ、どうしても必要なものでなく、他にもいるとしたら、どうしてその女性にもわれわれが勝手に奪い取った心変わりの権利を与えないのか？ このことは、もちろん、情念にしか当てはまらない。そうでなければ、反社会的なものとなるだろう。それに何よりも、破棄されることのない結婚が必要であることを証明するのは、情念の不確実さ²⁷なのだから。

26 *Ibid.*, p. 682

27 *Ibid.*, p. 683.

いささかややこしい言い方ながら、要するに、恋愛感情を独りよがり独占することの弊と、感情は規制することができないが、破棄されることのない結婚という制度が、その歯止めとなる、というのである。このあたりは、いかにも政治家の演説を聞く思いがするだろう。そしてド・マルセーはこう付け加える。

仕返しを無くしてしまえば、裏切りはもはや恋愛では何の問題もない。この世にたった一人の女性しか自分にはいないと思う人間、そうした連中が復讐へと駆り立てられるのだ。しかもそういう場合、たった一つの復讐の仕方しかない。つまりオセロ式の復讐だ。そして私の場合もそうだった²⁸。

純粹に相手を思う気持ちが強ければ強いだけ、たった一人の女性と思いこんでしまう。そしてその女性の裏切りにあうと（あるいは裏切られた、と思うだけで）、相手を殺すことによって欺かれたことへの意趣を晴らす。これがド・マルセーの仕返し（復讐）の論理である。このことは、こののちこの短編小説の中で幾つか語られる復讐劇の論理的な土台をあらかじめ含意するものとして記憶しておく必要がある。

この苦い体験があって、ド・マルセーは純粹な、絶対的な愛という幻想から離れて、自由な恋愛に身をやつすようになった。そして恋愛の対象は先の女性とは別なタイプの美女とはなったが、また先の女性とも同じようにつき合うことを止めなかった。それはそれなりの腹づもりがあったからだと言はう。そして彼は自分の髪の毛の束を作らせるのに、腕の良い職人のところに行く。先に彼の最初の恋人が「私が熱愛するその人はひたすら家に引きこもって私のシャツに自分の髪の毛で徴をつけていた。」*mon idole s'était enferm  pour marquer mon linge avec ses cheveux* という文章を思い起こそう。シャツに恋人の髪の毛でイニシャルを付けることは、昔江戸の恋人たちがそれぞれの腕に相手の名前を入れ墨して愛を誓った類いだろうか²⁹。それはド・マルセーがイニシャルを依頼した髪の毛細工の職人の言葉、「ここ一年くらい、皆がシャツに髪の毛で印をつけるのに夢中になりましてね、で、有り難いことに、私には綺麗な髪がたくさんあって、腕の優れた縫子さんがいましたから³⁰」という言葉からもわかる。

つまり先のド・マルセーの年上の恋人も、彼の髪の毛でシャツにイニシャルを入れることに精を出していた、と思わせてはいたが、じつは店に注文に出すことも可能だったのだ。ド・マルセーは自分が持っていた彼女の縫い付けのあるハンカチを出し

28 *Ibid.*, p. 683.

29 江戸古川柳に「母の名は親仁の腕にしなびて居」とある。

30 *Ibid.*, p. 684.

て彼に鑑定してもらおうと、まさしくその職人の妻自身が苦心してイニシャルを縫いつけたものだった。彼はすっかり女性というものを信用できなくなったと告白する。

いったん相手の年上の女の不実を思いこんだアンリ・ド・マルセーは、髪の毛でシャツやハンカチを刺繍する業者を訪ねて、自分のもらったハンカチの髪の毛のイニシャルが、その職人の妻手ずからの品だったのを確かめて、いよいよ女の不貞を知ることになる。そして二ヶ月後、彼は恋人の所に行き、愛を語り合う、その時はお定まりのように、相手に本当に私を愛しているか、いつまでも愛しているかなどと聞くものだ。

シャルロットはあれこれと欺瞞の技の華々しい成果を展開してみせた。自分はあなたなしでは生きていけない、あなたがたった一人、自分にとってこの世での男だ。自分があなたにとって疎ましく思われないかと心配だ、だってあなたがいると自分は何がなんだか判らなくなってしまう。あなたの傍にいと自分のいろいろな能力が恋一筋に働く。それに自分がか弱いからこんなに心配ばかりしてはもたない。この半年ばかり、あなたと永遠に一緒にいられる方法はないものかと考えてきた。神様だけがこういう心の秘密をご存じだ。要するにあなたは私にとって神様³¹のようなひとなのよ!

ここで初めてド・マルセーの6才年上の恋人の名前が明らかにされる。バルザックのプレイヤッド版第12巻に『人間喜劇』に登場するすべての人物の説明があるが(これは19世紀末以来何度も試みられてきているが、現在のところ、プレイヤッド版のものが一番詳しい。ただしよくよく調べないと粗漏のところもないではない)、このシャルロットなる人物は、ド・マルセーが語る『続女性研究』のこの場面においてしか登場せず、他の作品では言及されない。ここでシャルロットがド・マルセーに語る睦言は、それこそ恋人がよくかき口説く決まり切った陳腐な台詞と言うほかない。いかに彼女がひたすらド・マルセーを愛し、彼のことだけしか考えていないか、ということにくどくどと繰り返しているだけだ。何よりも「あなたなしでは生きていけない云々」*pas vivre sans moi, j'étais le seul homme qu'il y eût pour elle au monde*とあって、それだけでも、もっとも陳腐な代物だが、最初にこのような大前提を持ち出すところに、彼女のしたたかさがある。

31 *Ibid.*, p. 684.

5. Vouvoyer と tutoyer

「あなたなしでは生きていけない」からのシャルロットの口説きの順番を変えれば、彼女の言葉のストラテジーはたちまち了解されるだろう。自分が相手に疎ましく思われぬかと心配するのは、自分を相手よりもいっそう低い立場において、卑下してみせることで相手の歓心を買う。自分のエスプリがすっかり奪われてしまい、身に備わったいろいろな「能力」*facultés* が、すべて愛へと向かってしまう、と言うのも、彼女の才気を重んじ、彼女の才能をこそ買っていたアンリ・ド・マルセーの心の働きを読んだ上での台詞と考えられよう。もちろん愛が消えないでいるときは、あなた無しでは生きていられぬ、とか、この世で男はあなた一人、といった台詞や言い回しは、実に快く耳に響くもので、こちらも同様の言葉を相手に浴びせることになるが、ひとたびそれらの言葉に疑いを差し挟んで、客観的に耳を傾ければ、とても笑わずに聞いていられないようなものが多いことは、誰しも経験する。だからこそ、シャルロットは、それを逆手に用いて、最後に私の淨い気持ちができるのは神のみで、嫉妬にかられた若い男には到底わかるまい、と釘をさすことを忘れない。

ド・マルセーはこうしたシャルロットの甘い、とろけるような、しかし計算づくめの言葉を言わせるだけ言わせておいて、いかにもその睦言に合わせる口調でこう尋ねる。

「で、いつ侯爵と結婚するんです？……」この一撃はぐさりとあまりに直截で、私の視線もあまりに彼女のそれにまともに向き合うものだったので、彼女の手がいかにも優しげに私の手の中に収まっていたのが、どれほど微かなものであろうとも、その震えているのを完全に隠し通すことはできなかった。その視線は私のまなざしにあって伏せられ、かすかに赤く頬が染まった³²。

この侯爵は、例の眼くらましのためと称して、社交界であたかも彼女がその男に対して恋人のようにふるまっていた、という人物である。いましも恋人はあなただけ、とかき口説いていたシャルロットに、とつぜん何の前触れもなく、言葉での一撃 *Ce coup de pointe* を食らわすことになる。ここで *Ce coup de pointe* とフェンシングの用語を使っていることに注意しておこう。すなわちド・マルセーがフェンシングに優れた腕前を示す人物であることを暗に示し、彼のライオン（社交界の雄）としての資質を浮かび上がらせるものなのである。

32 *Ibid.*, p. 685.

鋭いド・マルセーの反撃に、彼女はなんとか取り繕おうとする。しかしド・マルセーは彼女の相手の侯爵がきわめて信心深く、恋人としては物足りぬ。そこを自分が補っていたのだらうと喝破する。まさかという顔をするシャルロットに、ド・マルセーは追い打ちを掛ける。ここは原文も合わせて引用しておこう。

“Épousez-le, je vous le permets, repris-je en répondant à son geste par le *vous* de salon, il y a mieux, je vous y engage. —Mais, dit-elle en tombant à mes genoux, il y a quelque horrible méprise: je n’aime que *toi* dans le monde; tu peux m’en demander les preuves que *tu* voudras. —Relevez-vous, ma chère, et faites-moi l’honneur d’être franche. —Comme avec Dieu. —Doutez-vous de mon amour? —Non. —De ma fidélité? —Non. —Eh bien, j’ai commis le plus grand des crimes, repris-je, j’ai douté de votre amour et de votre fidélité. Entre deux ivresses, je me suis mis à regarder tranquillement autour de moi. —Tranquillement! s’écria-t-elle en soupirant. En voilà bien assez, Henri, *vous* ne m’aimez plus.” (単語中の下線、イタリックは論者に拠る。)

「あの人と結婚なさればいい、私の方はそうして下さって結構です。」と私は彼女のそうした仕草に答えて、サロンで使う丁寧なもの言いであ答えた。「それどころか、私の方からお薦めしますよ」「でも、」と彼女は私の膝に崩折れながら言う。「何かとんでもない誤解があるのだわ。私が愛しているのはこの世であなた一人なの。あなたがその証拠を出せと言うなら、好きなだけ出せるわ。」「お立ち下さい、ねえ。どうか私には素直におっしゃってください。」「神様に対してと同じくらい、そうしているわ。」「私の愛情を疑っていますか?」「いいえ」「私に不実ではないと?」「ええ」「なるほど。私は罪の中でも一番重い罪を犯したのですね」と私は答えた。「この私はあなたの愛情と不実を疑ったのです。あなたの愛とあなたの誠実に酔いしれている時、私は心を落ち着けて自分の周りを見始めました。」「心を落ち着けて、ですって!」と彼女は声をあげると、吐息を洩らした。「わかりました。もう結構よ。アンリさん、あなた、それじゃもう私を愛してはいら³³っしやらないわけね。」

ド・マルセーの下線で示した部分とシャルロットのイタリックで示した部分に注目してほしい。Vouvoyer「相手に鄭重に呼びかける」と tutoyer「相手に親しい口調で呼ぶ」の見事な呼称の変化が、じつに有効に二人の関係に作用していることが理解

33 *Ibid.*, p. 685.

されるだろう。ド・マルセーはまずシャルロットから、愛情と貞節に関して、自分のことに関して、相手がどう言うかをまず確かめておき、彼女が相変わらず自分に愛情を抱き、裏切っているなどとは思っていない、と言わせたあとで、同じ問いに対する自分の答えとして、彼女について、もはや信頼を抱いていないことをはっきりと通告する。これはある意味できわめて残酷な「仕返し」、復讐ということも言えよう。ド・マルセーの「あなたの愛とあなたの誠実さに酔いしれている時、私は心を落ち着けて自分の周りを見始めました。」Entre deux ivresses, je me suis mis à regarder tranquillement autour de moi. という言葉、これは、年端もいかぬ彼が、いかにも相手の手玉に取られてすっかり有頂天になっていた。けれども、少し冷静になって考えてみると、というので、彼の「酔いしれている」ivre という語は理性的な判断を欠いていたことを明らかにする。そしていかにも愚かな酔いから醒めるように、「心を落ち着けて自分の周りを見る」regarder tranquillement autour de moi. とあるのは、どれほど皮肉が効いて、論理のどんでん返しとその明晰性が効果的に響くことか。

シャルロットは突然のアンリの態度の急変、これまで暗に了解済みとしていた侯爵との結婚話を、彼から出し抜けに突きつけられたことに戸惑いながらも、なお若い情人の本心が見えず、彼の愛情をまだ翻弄することができると思い、彼の自分への愛情の変わりなさを信じて（だからこそ、アンリが「あなたは私のあなたへの愛情を疑っているか?」と聞かれて、すぐ否 Non と返事ができるのであり、その返事によってアンリの愛情を確信するために、アンリの言葉を借りれば「愛するふり」を一生懸命して見せたのだ。ところがそのアンリが、恋の酔いの中にも、心を落ち着けて、冷静に自分の周りを眺めだした、とおそらくは極めて冷徹な声で語るのを聞いて、その時に至って、彼女も彼の心理を翻然と悟ることになる。そのあたりの駆け引きを鮮やかに示すのは、相手への呼称のたちまちの変化である。今はこれまで、とシャルロットも彼女の本性を表して、それまでのアンリへの tutoyer を止め、冷ややかな vouvoyer に口調を変えることになる。アンリの vouvoyer と、その立場を異にしての感情のやりとりが、単に呼称を変化させることだけで、じつに鮮やかに描き出されているのである。

いったいつから侯爵とのことをご存じだったの? という彼女の問いに、マルセーはしばしば聖トーマス教会にミサについて行かせた時、信心家の侯爵が一緒だったこと、そして何よりも彼が風邪を引いて、逢い引きに出かけられないと断りの手紙をだした時に、侯爵を家に呼んだこと、しかも自分は一人で家にいたと嘘をついたことなどを挙げる。そしてやはり裕福で名家でもある侯爵との結婚が、彼女にとって有利だと彼は皮肉を込めて言い、自分がその妨げにならないだけでもましなはずだと暗に彼女を責める。そして、

そう、あなたは**ずいぶん**やきもきされたはずですよ、私と別れるについてはね。だって彼(侯爵)はあなたのことをいつも見張っているから。今が別れどきです。侯爵は厳しい道徳観の方です。あなたは貞淑な妻にならないといけませんよ、そのことはご忠告しておきます。侯爵は自惚れが強い。あの人は自分の妻を鼻にかけますよ。³⁴

先にオセロのデスデモーナへの嫉妬の話が何度も繰り返されたことを思い出そう。ド・マルセーはあたかも自分がオセロであるかのように嫉妬心の持ち主であるかのように話しながら、その実年齢からすれば、じつは彼はオセロではなく、むしろオセロが妻の浮気相手と信じてすさまじく嫉妬するキャシアスにこそ近いわけで、その意味で、ここで引用した現在中年の分別ある男としてのド・マルセーの言葉は、本来の人妻が若い男と不倫をして、それを疑った中年の夫が嫉妬し、ついにはその誇りが傷つけられたことによって、妻とその恋人たちに復讐する、という方向へと進むことを示すだろう。マルセーの打ち明け話は、従って、いわばその糸口、進展の経過の、あたかもその雛形、イントロダクションの役割を果たしていると言えるのである。

ド・マルセーはシャルロットに侯爵との早い結婚を勧め、彼と同じように信仰に篤くなるように説くと、彼女はようやくこの若い男が自分と訣別する堅い意志を知って、自分の本当の立ち位置を明らかにする。すでに相手のへの呼称は vous である。

彼女は身を起こすと、二度彼女の部屋を歩いて廻った。本当に動揺しているのか、それとも見せかけかはわからない。それから、おそらくそのポーズも目つきもいまの新しい状況にふさわしいものを見つけたのだろう、私の眼の前で立ち止まると、手を私の方にさし出して、動揺したような声でこう言った。「なるほど、わかりました。アンリさん。あなたは誠実で、気高い、そして魅力的な人ね。私**はあなたのことは決して忘れないわ。**」それは見事な駆け引きだった。³⁵

シャルロットは、アンリがもはや彼女に絶対の信頼と愛情を抱いておらず、侯爵とのことも承知していることをはっきりと知ると、若い男との恋愛を続けた方がよいか、侯爵といさぎよく結婚した方がいいか、自分の閨房を2度歩き回っての思案のあげく、きっぱりとアンリと別れることに決したのである。アンリが「見事な駆け引き」と彼女の応対を形容するのは、アンリに対しての彼女の誉め言葉、vous êtes un loyal, un noble et charmant homme 「あなたは誠実で、気高い、そして魅力的な人」にお

34 *Ibid.*, p. 686.

35 *Ibid.*, pp. 686-687.

いて、まず loyal と、本来の意味で「忠実な」、もっと言えば中世騎士の道徳で一番とされる、自らの「思い姫」に対する忠誠を意味するから、最初にその形容をアンリに浴びせるのは、彼に二人の関係を侯爵に暴露することがないように、口封じを暗にしているのだ。そしてその次に noble 「気高い」という形容詞を加えるのは、彼が口を噤んでくれるのであれば、noble と認めよう、そしてさらにその行為によって、初めてアンリが魅力的な男のまま、自分の記憶の中にとどめておける、というシャルロットのアンリへの謎かけにほかならない。それを理解するからこそ、ド・マルセーは、彼女の「見事な駆け引き」une admirable stratésie. と言うのである。

アンリがこの後、どういう態度に出るか。それが心配なシャルロットは、いかにも失恋の憂き目にあうアンリを心配するかのよう、これからあなたはどうかさるの？と、愛情がまだ残っている風に、甘やかに彼をソファに並んで腰掛けさせ、問いかける。アンリとシャルロットの息詰まるやり取りは以下のとおり。

私は彼女をじっと、一呼吸おいてから、じつに愛おしそうに眺めて、そしてこう言った。「そう、それを私は自分にも問うてみたのですよ。」「そう、じゃ、あなた、これからどうするの？」「私がこれからどうしようと思ったのは、あの風邪を引いたその次の日のことです。」「それで……？」と言った彼女は、いかにも不安げな様子をした。「それで、私は間合いを測ることにしたのですよ。そのご婦人とのね。僕はその人を口説くものと思われていましたから。」シャルロットは、さっとソファから立ち上がったが、それはまるで牝鹿が驚いてそうするままで、木の葉のように身をわななかせると、私をきっと睨んだ。その視線は、女性がその品位も、羞恥も、繊細さも、優美ささえすべて忘れて注ぐもので、きらきらと光るそのまなざしは、片隅に無理矢理追いやられた蝮のそれだった。そうして彼女はこう言った。「この私は、あの人を愛していたのよ！そんな気持ちになるのに抗っていた私なのに！この私は……」³⁶

6. 不実な恋の駆け引き

年上の恋人シャルロットの不実を知ったアンリは、何食わぬ顔で彼女と逢い引きを重ね、その場でいかにも恋人同士のように振る舞いながら、その恋愛の口舌がもっとも甘美になろうとする時、シャルロットが見せかけの恋人に選んだはずの侯爵、その彼とあなたは結婚するのではないか、と問いつめ、彼女は、当初はたじろぎながらも

36 *Ibid.*, p. 688.

否定していたのが、だんだんにド・マルセーに言い負かされるにいたる。

アンリは、件の侯爵がシャルロットの邸に入るところを見たその時点で、彼女との関係を断ち切ることを決めた、とはっきりと言い、さらに彼女に対して挑戦的なことを言う。すなわち、「それで、私は間合い測ることにしたのですよ。そのご婦人とのね。私はその人を口説くものと思われていたから。」“je me suis mis en mesure auprès de cette petite dame à qui j'étais censé faire la cour.” その言葉の中でアンリが用いる「間合い」measure は、フェンシングにおいて相手との間合いの距離を言う。先にもド・マルセーは侯爵のことを引き合いに出した時、coup de pointe とフェンシングの攻撃用語を使った。相手に向かって、エペ（剣）を擬しながら、隙あらばさつと攻撃の一手を繰り出そうとしたのだ。

物語の冒頭、アンリがブロンドの要請で話をするように頼まれた時に、彼がテーブルのナイフを弄んでいたことを思い出そう。この言葉を剣の達人ド・マルセーに使わせることによって、そのナイフの扱いをあらかじめ示しておくことによって騎士としての彼の本姓を暗示し、さらに17才で出会ったシャルロットを語って、「その人は今でも十分パリで一番美しい女性の一人で通る人だ。じっさいその当時はその人が人目見てさえくれたら殺されてもいいと思ったくらい³⁷。」と、その女性の一瞥を得るためには決闘沙汰になっても構わぬ、と言っていたことと重ね合わせて、彼が並々ならぬフェンシングの名手であることが予測させていた。さらに今、そのアンリにフェンシングの用語「間合い」measure を用いさせることによって、彼が明らかな攻撃態勢をとることが予測されて、シャルロットは、アンリの真剣な復讐の意図に顔色を変えたのである。そしてまさしく窮鼠猫を囓むのたとえのとおり、自分が侯爵を愛していたこと、その気持ちとアンリへの気持ちとの間で葛藤があったことを初めて告白することになる。

シャルロットは堰を切ったように、ド・マルセーのいい加減さを非難し、自分たち女性はなんと不幸かと嘆く。そして彼女はきっぱりとアンリに言う。

「お別れね、ド・マルセーさん。」と彼女は言った。「あなたは私をずいぶん酷いかたちで欺いたのよ。」「侯爵夫人となられても」と私は答えて、腰低く応対した。「シャルロットに対して罵った私の言葉を覚えていることになりますか?」「当たり前よ。」と彼女は苦い口調で答える。「それじゃ、私を憎んでいるわけですね?」彼女は肯いた。そして私は私でこう呟いた。「なんとかうまく逃げおさせた!³⁸」

37 *Ibid.*, p. 679.

38 *Ibid.*, p. 688.

ド・マルセーの最後の言葉は意味深長だ。シャルロットは「アディュー」*adieu* という決定的な別れの言葉を使うことで、彼との訣別を宣言する。ある意味で裏切ったのはシャルロットの方だから、本来マルセーの方が別れを宣言して踵を返せばよさそうなものだが、シャルロットは、なおアンリと侯爵の二股をかけようとしているのであり、下手をすると、純粹無垢の愛情を傾けていたアンリを、通常の恋愛沙汰と同じように扱い、侯爵ともぐずぐず、アンリともぐずぐずと関係が続けていくかも知れない。そんな未亡人に、煩雑ないざこざを起こさず、きっぱりと関係を清算するには、当の彼女から「アディュー」という決定的な別れの言葉を引き出すことが必要なのだ。シャルロットは「あなたは私をずいぶん酷いかたちで欺いた」*vous m'avez horriblement trompée*. というが、それはド・マルセーが彼女の不貞を知りながら、しかも知らぬ態で、逢瀬を交わしていたことを指す。身勝手な言い分ながら、革命前に大貴族の家に生まれて、革命期の動乱、ナポレオン体制と生き抜いてきた女性の強さであるとも見られる。

マルセーは女に「侯爵夫人となられても」、若い未亡人「シャルロットとして」彼から受けたこの屈辱、すなわち自分が若い男から棄てられることになったことを忘れないかと聞くのは、ある意味では、侯爵夫人となった彼女とは無縁であるという謎であり、彼女にマルセーを憎ませることによって、彼自身が彼女から離れるきわめて有効な、しかも紳士の礼になかった別れ方となるはずだからだろう、彼が「なんとかうまく逃げられた！」*Il y a de la source* と眩くのは、そうした名誉ある撤退としての「逃げ道」を見つけた安堵の言葉だったのだ。つまり、

私はその場を立ち去ったが、彼女になにか名誉回復せずにはいられないような気持ちをおこさせておいたつもりだった。さて、諸君、私はずいぶんいろいろ人物について研究したけれど、女性に関して武勇伝のある人も、たとえばリシュリュー元帥もロザンもルイ・ド・ヴァロワも、初回に、これほど賢明な撤退をした人は誰もいないと思うね。私の精神と心情については、その時以来、すっかり形作られてしまった。だからわれわれにあれほども馬鹿げた真似をさせる無反省な行動を制し終えたこの自制力が、こうして諸君もご承知のと通りの冷静さをもたらしたわけさ。³⁹

女性にもてた有名人としてマルセーが例に挙げるリシュリュー元帥は、18世紀フランスの戦略家で外交官として有名な軍人（1696-1788）である。バルザックは『人間

39 *Ibid.*, p. 688.

喜劇』の中でしばしばこの人物を女性との色模様の多かった人物の例として挙げている。ロザンは本名アルマン＝ルイ・ド・ゴント＝ピロン、ロザン公爵 Armand-Louis de Gontaut-Biron, duc de Lauzun (1717-1793)、放蕩の青年時代を過ごし、アメリカ独立戦争にも参加、国民公会の貴族の議員として活躍、また次にあげられるルイ・ド・ヴァロワは、プレイヤッド版の注釈者ニコル・モゼ Nicole Mozet によれば、おそらく、Louis-Philippe-Joseph, duc d'Orléans, dit Philippe Égalité (1747-1793) のことで、彼の家系はオルレアン家の支流としてヴァロワ公爵所領地をルイ14世に与えられているので、ルイ・ド・ヴァロワとも言うという。いわゆるフィリップ平等公として世に知られ、1789年に貴族層からの議員として国民公会に選出されている。彼はイギリスでゴール公爵と親交を結び、いわゆるダンディズムをフランスに持ち込んだ一人として有名だ。先のロザン公爵の親密な秘書も務め、かつヴァンデ戦争にも従事したが、革命政府によってギロチン台に上った。その回想録がロザン公爵 duc de Lauzun の名で1822年に刊行されているので、「ロザン」とする表記からしても、バルザックがこの回想録を読んでいた可能性が高い。

アンリが挙げる3名は、ともに政治の世界できわめて重要な位置で活躍した大物貴族で、7月王政の大政治家を気取るアンリ・ド・マルセーが引き合いに出す意味もあろうというものだ。マルセーはこうして、最初の純情な恋愛、純粋な恋愛に欺かれたことによって、以降、愚かな恋愛沙汰に首を突っ込んで、神経をすり減らすことなどない、冷徹な自制力を誇る男となったというのが彼の打ち明け話のオチとなる。これは女性にかけて凄腕を揮い、相手の女性をとことんまで追いやって、なお冷然と金の切れ目が縁の切れ目と突き放すマルセーの日常を思い起こさせる言葉でもある。したがって、先の文章に続いて、

「なんてまあ、2番目の恋人のお気の毒なこと！」とニュシンゲン男爵夫人が言った。

気づかれない程のほほえみがド・マルセーの青白い両の唇に^は刷かれ、デルフィーヌ・ド・ニュシンゲンは⁴⁰顔を赤くした。

2番目の恋人が気の毒、とデルフィーヌが言うのは、彼女自身、1819年の時点で、アンリ・ド・マルセーの愛人であり、彼にお金を貢ぐことができなくなって、別れる羽目になり、年若いラスティニャックと新しく恋愛を始めることになったことは、『ゴリオ爺さん』(1834年)において詳しく書かれている。こうしてバルザックの『人間

40 *Ibid.*, p. 688.

喜劇』の世界に親しめば親しむほど、登場人物たちの人間関係が縦に横に繋がって、興味が尽きないことを、この夜会の様々な会話は教えてくれる。

マルセーがシャルロットと恋愛関係にあったというのは、先にも論じたとおり17才の時である。そして王政復古が軌道に乗りかけた頃、というのだから、1815年か1816年のこと。この時『黄金の眼の娘』の中では、異国の少女パキータと恋愛しているから、1819年のデルフィーヌとの恋愛沙汰が、彼女がそう願うように2回目、というのはどうも考えられない。すくなくともシャルロットのことがあって、純粋な恋愛など考えないようにしているはずだからだ。しかしデルフィーヌ・ド・ニュシゲンが、自分との恋愛をその日に聞いたシャルロットとの最初の恋愛に次いで2度目のもの、と信じたがるのも無理はない。したがってここもまたバルザックの日付などの粗漏という意見に与するよりは、むしろデルフィーヌの心情を巧みに表現している、と考えたい。だからこそド・マルセーはそうしたデルフィーヌの可憐な、しかしある意味では滑稽な思い違いに対して、(もちろん、彼女への愛惜の念は籠もっているにせよ)、思わず知らず、皮肉な笑いを漏らさざるを得なかったのだ。「ド・マルセーの青白い両の唇」les lèvres pâles de de Marsay という表現は、そうした冷徹な彼の心情を表して遺憾がない。それゆえこそ、また、その青白い唇の笑いにデルフィーヌも自分の過去への思いと、ほんどに2回目だったのか? という反省の思いをさせられて、顔を赤くしたのだ。

『私生活情景』の配列はすでに何度も述べたように、それらを連関させようというバルザックの意向が強く示されているものと論者は考えている。たとえば『私生活情景』の最後の情景に位置するこの『続女性研究』においても、『ゴリオ爺さん』のデルフィーヌとド・マルセーとの破局の場面をおのずと想起させて、一連の『私生活情景』を読んできた熱心な読者には、きわめて興味深いものがあり、作者もまたそのような読者の姿を脳裡に描きながら、ペンを運ばせたに違いない。

デルフィーヌのため息のような言葉に続いて、その夫であるアルザス人銀行家ニュシゲン男爵が、「何テ、ヒトハ忘レテシマウモノカ！」Gomme on ouplie! と叫ぶのはご愛敬ながら(彼は妻とアンリとの関係を知っていないか、あるいは知っていてそれこそ忘れていたふりをするのか。ここにも作者の皮肉な顔が浮かぶ)、それを聞いて満座が笑い、その妻であり、「2番目の恋人」と自覚するデルフィーヌまでも、笑わずにはいられないことになる。つづいて口を挟むのはレディ・ダッドレーだ。

「皆さんは、皆、その方を非難なさろうというのですね。」とレディ・ダッドレーが言った。「私はわかりますわ。その人は自分の結婚を、そんなに不実なものとは思っていなかったのです。殿方は到底愛の忠実さと貞節とを区別しようとは思

われませんか。私はその方を存じ上げています。マルセーさんが私たちにお話しになったその方をね。あなた方のお国での最後の貴婦人というような方です⁴¹わ。」

とコメントするのを聞いて、その女性に関する具体的な詮議に移るのを嫌うかのよう
に、ド・マルセーはダッドレー夫人が言う「貴婦人」 grandes dames というものがど
ういうものであったか、という話へと話題を移す。

7. サロンの女優

ところで、このダッドレー夫人の言葉は、実はフルヌ版において挿入された部分
で、初出の「アルティスト」誌で『閨房の一場面』 «Une scène de boudoir» と題さ
れた短編においては、「その場に居合わせた他の客と同じように、デルフィーヌも笑わ
ざるをえなかった」という文章で終わっている。ニコル・モゼの注によれば、未刊行
の断片『サロンの女優』 *La Comédienne de salon* が、ロヴァンジュール文庫に残され
ていて、これはプレイヤッド版バルザック『人間喜劇』最終第12巻の *Œuvres
ébauchées* の中に収められている。そこではド・マルセーがつきあっていたシャル
ロットが、じつは le duc de Rhétoré レトレ公爵の妻となったことが明らかにされてい
る。その書き出しは、

サロンの女優 その場に居合わせたのが、冷たくからかいの眼でみる連中の一人
だった。家名嚇々として、そのため、どんなふるまいをしてもお咎めなく、社交
界のことも知り、貴族としての教育もあって礼儀作法のぎりぎりのところは守り
ながら、出てくる言葉は一種の残酷さをそのまま写す⁴²輩である。

となっていて、それが年齢40才のレトレ公爵ということになる。彼を40才というのは
いささか本文のド・マルセーの話と食い違うわけで、彼の初恋談ではマルセーが17才、
公爵はもっと年上でなければならない。ところがその公爵をレトレとすると、マル
セーが昔語りをする時の、このサロンにおいての年齢はすでに40才を越していること
になるから、当時レトレも17才か、あるいはさらに下の年齢でなければならない。あ
るいはそんなこともあってか、マルセーが語る公爵夫人となったシャルロットの詮議

41 *Ibid.*, p. 688-689.

42 Balzac, *CH.*, tome III, p. 1497.

に連なるエピソード「サロンの女喜劇役者」は、結局この『続女性研究』を再編する時には採用されず、レトレ公爵という、あるいはシャルロットの見かけの恋人役を演じさせられた挙げ句に、結婚にまで至った男とマルセーとの因縁話に展開していく話に変え、ダッドレー夫人というイギリス生まれの艶福夫人、あるいはド・マルセーにとっては義理の母親にあたる奔放な女性の「私は その人（シャルロット）を知っている」という言葉を挿入することによって收拾を図ったということではないだろうか。

こうしてダッドレー夫人の言葉を受けて、ド・マルセーがその「貴婦人」Grandes dames とはどのようなものか、そうした種類の女性は、かれこれ50年来、すなわちこの話を1832年頃と想定すると、ちょうどフランス革命前の1780年頃となるが、段々と貴族社会で威権を振るった la duchesse や la marquise（侯爵夫人）がいなくなり、（本編に採録しなかった先の断片では「la duchesse はフランスで、30人しかいない」ということを登場人物の一人に言わせている）むしろ男爵家がふえてきている、といった話題をきっかけに、ここから元来バルザックが発表していた『フランス人自身が描くフランス人像』という本に収められた La femme comme il faut 「しかるべき女性」という文章が展開されることになる。

この議論は、ド・マルセーやド・ヴァンドネス、すなわち『谷間の百合』に登場するフェリックス・ド・ヴァンドネス、さらにダッドレー夫人、ジョゼフ・ブリドー、ダニエル・ダルテーズ、ロシュフィッド侯爵など、いわばバルザックの『人間喜劇』を彩る多彩な登場人物が次々と発言する形になって、『人間喜劇』の読者は大いに喜ぶところだが、内容はバルザックのいわゆる Légitimisme 「正統王朝主義」の展開ということになる。すなわちナポレオンや、現七月王政政府によって、なし崩しに革命前の大貴族たちの体面が保てないような現体制に対する批判、提言が主となるような、いわゆる風俗ルポルタージュ風の文章が、先のド・マルセーの小説風の回想に続いて登場するのは、たとえ彼の相手のシャルロットが、そうした Grandes dames の一人であったとしても、小説の完成度という点で見れば、いささか緊迫感を欠かせるものと言わざるをえない。まして21世紀の東洋の読書子には、それほどの感銘をもたらすものではない。ただ「公爵夫人」duchesse の代表として上げられるタレーラン公爵の家庭に関するエピソードめいたものや、ジョゼフ・ブリドーが慨嘆して言う、

「ああ、残念ながら、そうですね」とジョゼフ・ブリドーが言った。「われわれの時代にはもうああした美しい女性の花々は無くなってしまいましたよ。フランス王朝の偉大な世紀を飾っていた花々が、ね。貴婦人の扇は壊れてしまいました。いまの女性は顔をもう赤らめることはないし、悪口も言わない、ひそひそ話もし

ない、顔を隠すこともなければ、また覗かせることもありません。扇はもう風を送るためだけに使われるのです。ある物事がそのものである以上のものでなくなれば、それはあまりに役立つことばかりで、豪華なものに結びつかないのです⁴³よ。」

の言葉にも現れるように、一種のノスタルジーめいた感想となり、現代のブルジョワが支配する、きわめて現実的な、即物的な考え方を文学者らしく批判しているふしが垣間見られる。いずれにしても、彼らの議論の趨勢は、かつての革命前の「貴婦人 *grand dame*」が「しかるべき女性 *la femme comme il faut*」へと移っていることを確認する議論が交わされるのである。アンリ・ド・マルセーの17歳の恋と銘打たれるような、時の宰相のサロンでの「告白」は、19世紀前半のフランス貴族社交界の夜会の会話の一つのひな形としてその典型を示すとともに、バルザックの『人間喜劇』成立の秘密をもさりげなく開示する、きわめて貴重なスケッチと言えようか。

43 Balzac, *A.f.*, p. 690.